

菊あわせ

泉鏡花

青空文庫

「蟹かにです、あのすくすくと刺とげのある。……あれは、東京では、まだ珍らしいのですが、魚市をあるいていて、鮎ふな、鰯ぼらなど、鰻かたうお魚をぴちやぴちや芻はねさせながら売っているのと、おし合あつて……その茨いばらがに蟹が薄暮うすくれがた方の焚火いばらがにのように目についたものですから、つれの婦おんなども、家内と、もう一人、親類の娘をつれております。——ご挨拶をさせますのでござ

。」「
画工ほざかいっしや、穗坂ほざかいっしや一車氏は、軽く膝の上に手をおいた。巻まきた蓑たばこを火鉢にさして、

「帰りがけの些細な土産ものやなにか、一寸用達ちよつとようたしに出掛けておりますので、失礼を。

その娘の如きは、景色より、見物より、蟹を啖くらわんがために、遠路えんろくツツいて参りました
ようなもので。」

「仕合せな蟹でありますな。」

五十六七にもなろう、人品じんぴんのいい、もの柔かな、出家容すがたの一客が、火鉢に手を重ねながら、髯くちもとのない口許くちもとに、ニコリとした。

「食われて蟹が嬉しがりそうな別嬪べっぴんではありませんが、何しろ、毎日のように、昼ばたごから——この旅やど宿の料理番に直接談判で蟹を食やります。いつも脚のすつとした、ご存じ

の楚蟹ずわえの方ですから、何でも茨を買って帰って——時々話して聞かせます——一寸幅いっすんの、ブツ切ぎりで、雪間ゆきまの紅梅こうばいという身どころを嚙やろうと、家内と徒党をして買ったのですが、年長者に對する礼れいだか、離はなすまいという喰く心坊しんぼうだか、分りません。自分で、赤鬼の面という……甲羅かろうを引ひからげたのを、コオトですか、羽織うゑですか、とに角紫色の袖にぶら下げた形は——三日月、いや、あれは寒い時雨しぐれの降ふつたり留やんだりの日暮ひくれ方がただから、蛇の目とか、宵闇よあやの……とか、渾名あだなのつきそうな容よう子すで。しかし、もみじや、山茶花さざんかの枝えだを故わざと持もつて、悪く氣取きとつて歩あ行るくよりはまりました、と私が思うより、売うつてくれた阿媽おつかあの……榮螺さざえを拳こぶしで割わりそうなのが見兼みかねましてね、(竺ざる一枚散財さんざいさつせい、二銭にひやくか、三銭さんびやくだ、目の粗いのでよかんべい。)……いきなり、人混みと、ぬかるみを、こね分わけて、草わ鞋らじで飛出とびだして、(さあさあ山媽やまあば々が抱かいて来てやつたぞ)と、其処そこらの荒物屋あらいものやからでしよう、目筈めづを一つ。おどけて頭かぶへも被からず、汚かれた襟えりのはだかった、胸むねへ、両手りょうてで抱かいて来きましたのは、形かたちはどうでも、女おんなごころは優しいものだと思おもった事です。」

客僧きやくそうは、言うも、聞くも、奇特きせきと思おもつたように領うなずいた。

「値ねをききました始めから、山媽やまあば々が、品しなは受合うけあうぞの、山媽やまあば々が、今朝けさしらしらあけに、背戸せどの大釜おほくでうで上げたの、山媽やまあば々が、たつた今いま、お前まへさんたちのような、東京とうきょうものだろ

う、旅の男に、土産にするで三疋売ったなどと、猛烈に饒舌るのです。——背戸で、蟹をうでるなら、浜の媽々でありそうな処を、おかしい、と婦どもも話したのですが。——山だの——浜だの、あれは市の場所割の称えだそうで、従つて、浜の娘が松茸、占地茸を売る事になりますのですね。」

「さようで。」

と云つて、客僧は、丁寧にもたうなずいた。

「すぐ電車で帰りましょうと、大通……辻へ出ますと、電車は十文字に往来する。自動車、自転車。——人の往来は織るようで、申しては如何ですが、唯表側だけでしょけれど、以前は遠く視められました、城の森の、石垣のかわりに、目の前に大百貨店の電燈が、紅い羽、翠の鏃の千の矢のように晃々と兩道を射ています。魚市の鯛、蝶、烏賊、蝟を眼下に見て、薄暗い雲に——人の影を泳がせた処は、喜見城出現と云つた趣もありませんが。」

また雨になりました。

電燈のついたばかりの、町店が、一軒、檐下のごく端近で、大蟹の吹出したよ
うな、湯気をむらむらと立てると、蒸籠から簀の子へぶちまけました、うまそうな、饅

頭と、真黄色な？……」

「いが餅もちじゃ、ほうと、……暖い、大福を糰もちごめ米でまぶしたあんばい、黄色う染めた形ゆえ、菊見餅きくみもちとも申しますが。」

「ああ、いが餅……菊見餅……」

「黒餡の安菓子……子供だまし。……詩歌にお客分の、黄菊白菊に対しては、聊いささか僭せんじよ上うかも知れぬのでありますな。」

と骨ばった、しかし細い指を、口にあてて、客僧は軽く咳しわぶいた。

「——別いちべつ以来、さて余りにもお久しい。やがて四十年ぶり、初めてのあなたに、……ただ心ばかり、手づくりの手遊品おもちゃを、七つ八つごろのお友だち、子供にかえった心持で持参しました。これをば、菊細工、菊人形と、今しがた差出さしでて名告なのりはしましたものの、……お話につけてもお恥かしい。中味は安餡の駄菓子、まぶしものの、いが細工、餅人形とも称えますのが適当なのでありますよ。」

寛くわんいだ状さまに袖を開いて、胸ななめを斜に見返った。卓子台ちやぶだいの上に、一尺四五寸まわり白木の箱を、清らかな奉書包ほうしよづつみ、水引みずひきを装って、一羽、紫の裏うら白蝶しろちようを折った形の、珍らしい熨斗のしを添えたのが、塵も置かず、据えてある。

穗坂は一度取つて量を知つた、両手にすつと軽く、しかし恭しく、また押戴いて据直した。

「飛でもないお言葉です。——何よりの品と申して、まだ拝見をいたしません。——頂戴をしますと、そのまた、玉手箱以上、あけて見たいのは山々でございました。が、この熨斗、この水引、余りお見事に遊ばした。どうか絵の具は扱いますが、障子もはれない不器用な手で、しかもせつかちのせき心、引きりでもしましては余りに惜い。蟹を噛るのは難ですが、優しい娘ですから、今にも帰りますと、せめて若いものの手で扱わせようと存じまして、やつとがまんをしましたほどです。」

——話に機かけをつけるのではない。ごめん遊ばせと、年増の女中が、ここへ朱塗の吸物膳に、胡桃と、鵜、蒲鉾のつまみもので。……何の好みだか、金いりの青九谷の銚子と、おなじ部厚な猪口を伏せて出た。飲みてによつて、器に説はあろうけれども、水引に並べては、絵の秋草もふさわしい。卓子台の上は冬の花野で、欄間越の小春日も、朗かに青く明るい。——客僧の墨染よ。

「一献頂戴の口ではいかがですか、そこで、件の、いが餅は？」
一車は急しく一つ手酌して、

「子供のうち大好きで、……いやお話がどうも、子供になります。胎毒ですか、また案じられた種痘の頃でしたか、卯辰山の下、あの鶯谷の、中でも奥の寺へ、祖母に手を引かれては参詣をしました処、山門前の坂道が、両方森々とした樹立でしょう。昼間も、あの枝、こつちの枝にも、頭の上で鼻が鳴くんです。……可恐い。それに歩行かせられるのに弱って、駄々をこねますのを（七日まいり、いが餅七つ。）と、すかさされるので、（七日まいり、いが餅七つ。）と、唄に唄って、道草に、椎や、団栗で数とりをした覚えがあります。それなんですから。……」

ほかほかと時雨の中へ——餅よりは黄菊の香で、兎が粟を搗いたようにおもしろい。あれはうまい、と言いますと、電車を待つて雨宿りをしていたのが、傘をざらりと開けて、あの四辻を饅頭屋へ突切つたんです。——家内という奴が、食意地にかけては、娘にまけない難物で、ラジオでも覚えたんでしよう。球も鞠も分らない癖に、ご馳走を取込むせつは相競つて、両選手、両選手というんですから。いが餅、饅頭の大づつみを、山媽媽々の籠の如くに抱いて戻ると、来合わせた電車——これが人の瀬の汐時で、波を揉合つていますのに、晩飯前で腹はすく、寒し……大急ぎで乗ったのです。処が、並んで真中へ立ちました。近くに居ると、頬辺がほてるくらい、つれの持った、いが、饅頭が、ほかりと暖

い。暖いどころか、あつつ、と息を吹く次第で。……一方が切符を買うのに、傘は私が預り、娘が餅の手がわりとなる、とどうでしょう。薄ゴオトで澄ましたはいが、裾をからげて、長襦袢の紅入を、何と、引さばいたように、赤うでの大蟹が、籠の目を睨んで、爪を突張る……襟もとからは、湯上りの乳ほどに、ふかしたての餅の湯気が、むくむくと立昇る。……いやアたなびく、天津風、雲の通路、といったのがある。蟹に乗つてら、曲馬の人魚だ、といううちに、その喜見城を離れて行く筈の電車が、もう一度、真下の雨に濛つて、出て来た魚市の方へ馳るのです。方角が、方角が違ったぞ、と慌てる処へ、おっぱいが飲みたい、とあびせたのがあります。耳まで真赤になる処を、娘の顔が白澄んで青味が出て来た。狐につままれたか知ら、車掌さん済みませんが乗りかえを、と家内のやつが。人のいい車掌でした。……黙って切つてくれて、ふふふんと笑うと、それまで堪えていたらしい乗客が一斉に哄と吹出したじやありませんか。次の停車場へ着くが早い、か、真暗三宝です。飛降同然。——処が肝心の道案内の私に、何処だか町が分りません。どうやら東西だけは分っているようですけれども、急に暗くなつた処へ、ひどい道です。息休めの煙草の火と、暗い町の燈が、うろつく湯気に、ふわふわ消えかかる狐火で、心細く、何処か、自動車、俣宿はあるまいかと、また降出した中を、沼を拾う鷺の次

第——古外套は鷓鴣ですか。——ええ電車、電車飛でもない、いまのふかし立ての饅頭の一件ですもの。やつと、自動車で宿へ帰って——この、あなた、隣の室で、いきなり、いが餅にくいつくと、あ熱、……舌をやけどしたほどですよ。で、その自動車が、町の角家で見つかりました時、夜目に横町をすかしますと、真向うに石の鳥居が見えるんです。呆れもしない、何の事です。……あなたと、ご一所、私ども、氏神様の社なんじゃありませんか。三羽、羽搔をすくめてまごついた処は、うまれた家の表通りだったので……笑、事じゃありません。些と変です。変に、気味が悪い。尤も、当地へ着きますと、直ぐ翌日、さいわい、詠えたような好天気で、歩行くのに、ぼつと汗ばみましますくらい、雛が巢に返りました、お鳥居さきから、帽も外套も脱いでお参りをしたのです。が、拝殿の、階の、あの擬宝珠の裂けた穴も昔のまま、この欄干を抱いて、四五尺、這つたり、攀登ったか、と思うと、同じ七つ八つでも、四谷あたりの高い石段に渡した八九間の丸太を這つて、上り下りをする東京は、広いものです。それだけ世渡りに骨が折れます訳だと思いません。いや、……その時参詣をしていましたから、気安めにはなりましたものの、実は、ふかし立ての餅菓子と茨蟹で電車などは、些と不謹慎だったのですから。」

「それも旅の「興」。

と、客僧は、忍辱にんにくの手をさしのべて、年下の画工を、撫でるように言ったのである。

「が、しかし、故郷に対して、礼を失したかも知れません。ですから、氏神、本殿の、名め劍宮いけんぐうは、氏子の、こんな小僧など、何を刎はねようと、蜻蛉とんぼが飛んでもお心にはお掛

けなさいますまい。けれども、境内のお末社まつしゃには、皆が存じた、大分だいぶん、悪戯いたずらずきなのが

がおいでになります。……奥の院の、横手を、川端へ抜けます、あのくらがり坂へ曲る処

……」

「はあ、稻荷堂いなりどう。——」

「すぐ裏が、あいもかわらず、崩れ壁の古い土塀——今度見ました時も、落葉うすたかが堆く、樹

の茂りに日も暗し、冷い風が吹きました。幅なら二尺、潜り抜け二間けんばかりの処ですが、

御堂裏おじょうと、あの塀の間は、いかなるわんぱくと雖いえども、もぐる事は措おき、抜けも、くぐりも

絶対に出来なかつた。……思おも出しても気味の悪い処ですから、耳は、尖とがり、目は、たて

に裂けたり、というのが、じろりと視みて、穂坂の矮小僧ちびこぞう、些ちと怯おどかして遣やらう、でもつ

て、魚市の辻から、ぐるりと引ひき戻もどされたらうと、……ですね、ひどく怯おびえなければなら

ない処でした。何しろ、昔から有名な、お化ばけ稻荷。……」

と、言いかけると、清く頬のやせた客僧が、掌てを上げて、またニコリとしながら、頭を

一つ、つるりと撫でた。

「われは化けたと思えども、でござろうかな。……彼処を、礼さん。」——
急に親しく、画工を、幼名に呼びかけて、

「はて、彼処をさように魔所あつかい、おぼけあつかいにされましてはじゃ、この似非坊主、白蔵主ではなけれども、尻尾が出そうで、擦つとうてならんですわ。……口上
で申通じたばかり、世外のものゆえ、名刺の用意もしませず——住所もまだ申さな
だ、実は、あの稲荷の裏店にな、堂裏の崩堀の中に住居をします。」

という、顔の色が、思いなしでも何でもない、白樺の皮に似て、由緒深げに、うそ寂しい。

が、いよいよ柔和に、温容で、

「じゃが、ご心配ないようにな、暗い冷い処ではありません——ほんの掘立の草の屋根、
秋の虫の庵ではありますが、日向に小菊も盛です。」

と云つて、墨染の袖を、ゆつたりと合わせた。——さて聞けば、堂裏のそのくずれ堀の穴から、前日、穂坂が、くらがり坂を抜けたのを見たのだという。時に、日あたりの障子の白さが、その客僧の頬に影を積んで、むくむくと白い髯さえ生えたように見える。官

吏もした、銀行に勤めもした——海外の貿易に富を積んだ覚えもある。派手にも暮らし、寂しくも住み、有為轉變の世をすごすこと四十余年、兄弟とも、子とも申さず、唯血族一統の中に、一人、海軍の中將を出したのを、一生の思出に、出離隠遁の身となんぬ。世には隠れたれども、土地、故郷の旧顔ゆえ、いずれ旅店にも懇意がある。それぞれへ聞合わせて、あまりの懐しさに、魚市の人ごみにも、電車通りの雑沓にも、すぎこしかたの思出や、おのが姿を、化けた尻尾の如く、うしろ姿に顧み、顧み、この宿を訪ねたというのである。

一車は七日逗留した。——今夜立つて帰京する……既に寝台車も調べた。荷造りも昨夜かたづけた。ゆつくりと朝餉を済まして、もう一度、水の姿、山の容を見に出よう。さかり場を抜けながら。で、婦は、もう座敷を出かかった時であった。

女中が来て、お目にかかりたいお人がある……香山の宗参——と伝えて、と申されました、という。……宗さん——余りの思掛けなさに、一車は真昼に碧い星を見る思がしたそうである。いや、若じにをされて、はやくわかれた、母親の声を、うつくしく、かすかな、雲間から聞く思いがした、と言うのである。玉の緒の糸絶えておよそ幾十年の声であらう。香山の宗さん——自分で宗さんと名のるのも、おかしいといえばおかしい……あ

とで知れた、僧名、宗参との事であるが、この名は、しかも、幼い時の記憶のほか、それ以来の環境、生活、と共に、他人に呼び、自分に語る機会と云つては実に一度もなかった。だから、なき母からすぐに呼続がれたと同じに思った。香山の宗さん。宗さんと、母親の慈愛の手から、学校にも、あそびにも、すぐにその年上の友だちの手にゆだねられるのがならいだつたからである。念のために容子を聞くと、年頃は六十近い、被布を着ておらるるが、出家のようで、すらりと痩せた、人品の好い法体だという。騎馬の將軍というより、毛皮の外套の紳士というより、遠く消息の断えた人には、その僧形が尚お可懐い。「ああ、これは——小学校へ通いはじめに、私の手を曳いてつれてつくれた、町内の兄哥だ。」と、じとじと声がしめると、立がけの廊下から振返つて、「おばさんと手をひかれるのとどつち?」「……」と呆れた顔して、「おばさんに聞いてごらん。」「じゃあ、私と、どつち。」どうも、そういう外道は、速かに疎遠して、僧形の餓鬼大將を迎えるに限る。……。

女どもを出掛けさせ、慌しく一枚ありあわせの紋のついた羽織を引掛け、胸の紐を結びもあえず、恰も空いていたので、隣の上段へ招じたのであった。

「——特に、あの御堂は、昔から神体がわかりません。……第一何と申すか、神名が
 ありなさらないのでありましてな、唯至つて古い、一面の額に、稻荷明神——これは誰が
 見ても名書であります。惜い事に、雨露、霜雪に曝され、蝕もあり、その額の裏に、彩
 色した一叢の野菊の絵がほのかに見えて、その一本の根に（きく）という仮名があり
 ます。これが願主でありますか——或は……いや実は仔細あつて、右の額は、私が小
 庵に預つてありましてな、内々で、因縁いわれを、臆気ながら存ぜぬでもありませ
 ぬじやが、日短と申し、今夕はおたちと言う、かく慌しい折には、なかなか申尽さ
 れますまい。……と申す下から……これはまた種々お心づかいで、第一、鯛ひらめの白
 いにもいたせ、刺身を頬張つた口からは、些と如何かと存じますので——また折もありま
 しょうと存じますが、ともかく、祭られましたは、端麗な女体じや、と申します。秘密
 の儀で。……」

さて、随縁と申すは、妙なもので、あなたはその頃、鬼ごっこ、かくれん坊——勿論、
 堂裏へだけはお入りなさらなかつたであろうが、軍ごっこ。棕櫚箒の朽ちたのに、溝
 泥を搔廻して……また下水の悪い町内でしたからな……そいつを振廻わすのが、お
 流儀でしたな。」

「いや、どうも……」

「ははは、いやどうも、あの車がかりの一術ひとてには、織田、武田。……子供どころか、町中が大辟易だいへきえき。いつも取鎮め役とりしずが、五つ、たしか五つと思います、年上の私でした。これこれ、お覚えはあるまいけれども、町内の娘たちが、よく朝晩、あのお堂へ参詣をしたものです。その女体にあやかつたのと、また、直接に申すのも如何いかにじゃけれど、あなたのお母さんが、ご所有だつた——参勤交代の屋敷方は格別、町屋には珍らしい、豊国、国貞の浮世絵——美人画。それを間まさえあれば見あつ集まる……と、時に、その頃は、世なみがよく、町も穩おだやかで、家々が皆相応にくらしていましたから、縞しま、小紋、友染ゆうぜん、錦絵の風俗を、そのまま誂あつえて、着もし、着せたのでもありました。

江戸絵といつた、江戸絵の小路こうじと、他町たちょうまでも申しましたよ。またよく、いい娘さんが揃そろっていました。 (高松のお藤さん) (長江のお園さん、お光みつさん) 医師いしやの娘が三人揃そろつて、 (百合さん) (婦美さん) (皐月さつきさん) 齒を染めたのでは、 (お妾のお妻さん) (割鹿わりかの子のお京さん) ——極彩色の中の一人、 (薄墨の絵のお銀さん) ——小銀こぎんのむかし話を思わせませす——継子ままこではないが、預り娘の掛人かかりゆうどい居候いそうろう。あ、あ、根雪の上を、その雪よりも白い素足で、草履わらじばきで、追立おったて使いに、使いあるき。それで、なよなよと

して、しかも上品でありました。その春の雪のような膚へ——邪慳な叔父叔母に孝行な真心が、うつすりと、薄紅梅の影になつて透すきとお通る。いや、お話し申すうちにも涙が出ますが、間もなくあわれに消えられました。遠国へな。——お覚えはありませんか、よく、礼さん、あなたを抱いた娘ですよ。」

「済まない事です——墓も知りません。」

一車が、聞くうちに、ふと涙ぐんだのを見ると、宗参は、急に陽気に、

「尤も……人形が持てなかつた、そのかわりだと思えば宜しい。」

「果報な、羨しい人形です。」

「……果報な人形は、そればかりではありません。あなたを、なめたり、吸つたり、負つてふりまわしたり——今申したお銀さんは、歌麿の絵のような嫺々とした娘でしたが、——まだ一人、色白で、少しふとり肉で、婀娜な娘。……いや、また不思議に、町内の美しいのが、揃つて、背戸、庭でも散らず、名所の水の流をも染めないで、皆他国の土となりました。中にも、その婀娜なのは、また妙齡から、ふと魔に攫われたように行方が知れなくなりましたよ。そういう、この私にしても。」

手で压えた宗参の胸は、庭の柿の梢が陰翳つて暗かった。が、溜息は却つて安らかに聞

こえつつ。

「八方、諸国、流転の末が、一頃、黒姫山の山家在の荒寺に、堂守坊主で居りました時、千箇寺まいり、一人旅の中年の美麗な婦人——町内の江戸絵の中と……先ず申して宜しい。長旅の煩いを、縁あつて、貧寺で保養をさせました。起臥の、徒然に、水引の結び方、鬘斗の折り方、押絵など、中にも唯今の菊細工——人形のつくり方を、見真似に覚えもし、教えもされましたのが、……かく持参のこの手遊品で。」

卓上を見遣つた謙讓な目に、何となく威が見える。

「ものの、化身の如き、本家の婦人の手すさびとは事かわり、口すぎの為とは申せ、見真似の戯れ仕事。菊細工というが、糸だか寄切れだか……ただ水引を、半輪の菊結び、のしがわりの蝶の羽には、ゆかり香を添えました。いや、しばらく。ごらんを促したようで心苦しい、まずしばらく。」

——処で、名剣神社前の、もとの、私どもの横町の錦絵の中で、今の、それ、婀娜

一番、という島田鬘を覚えていらつしやろう。あなたの軒ならび三軒目——さよう、さよう、さよう、それ、前夜、あなたが道を違えて、捜したとお話のじや。唯今の自動車

屋が、裏へ突抜けにその娘の家でありますわ。」

「ええ、松村の（おきい）さん。」

といつて、何故か、はつと息を引いた。

「いや、あれは……子供が、つい呼びいいので、（おきいさん、おきいさん）で通りました。実は、きく、本字で（奇駒）とよませたのだそうでありましたが、いや何しろ——手綱染に花片の散つた帯なにかで、しごきにせずを着けて、チリリン……もの静かな町内を、あの娘があるくと直ぐに鳴つた——という育ちだから、お転婆でな——

何を……覚えておいでか知らん、大雪の年で、廂まで積つた上を、やがて、五歳になろうという、あなたを、半てんおんぶで振つて歩行いた。可厭だい、おりよう、と暴れるのを揉んで廻ると、やがてお家の前へ来たというのが、ちようど廂、ですわ。大な声で、かあちゃん、と呼ぶものだから、二階の障子が開く。——小菊を一束、寒中の事ゆえ花屋の室のかこいですな——仏壇へお供えなさるのを、片手に、半身で立ちなすつた、浅葱の半襟で、横顔が、伏目は、特にお優しい。

私は拝借の分をお返ししながら、草双紙の、あれは、白縫でありましたか、釈迦八相でありましたか。……続きをお借り申そうと、行きかかった処でありました。転婆

続けて呼んだが、舌が硬ばり、息つぎの、つぎぎましに、猪口ちよこの手がわなわなふるえた。「ゆ、ゆめだか、現うつつだかわかり兼ねます。礼吉が、いいかげん、五十近いこの年でありませんと、いきなり、ひつくりかえって、立たちどころ 処からだに身体からだが消えたかも分りません。またあなたが、忽たちまち 光こうみょう 明かくよう 赫耀かくようとして雲にお乗りになるのを視みたかも知れません。また、もし氏神の、奥境内の、稲荷堂うらの塀の崩れからお出でになったというのが事実だとすると……忽ちこの天井。」

息を詰めて、高く見据えた目に、何の幻を視たろう。

「……この天井から落葉がふって、座敷が真暗になると同時に、あなたの顔……が狐……」
 「おだや 穩おだやかかならず、は、は、は、おだやか 穩おだやかではありませんな。」

「いいえ、いや。……と思うほど、立処に、私は気が狂ったかも知れないと申すのです。」

「また、何故なぜにな。」

「さ、そ、それというのがです。……いうのがです。」

「いっくん まま 一いっくん 献いっくんまいれ。狐坊主、昆布こぶと山椒さんしよで、へたの茶の真似はしますが、お酌の方は一向いっこうなものじゃが、お一つ。」

「……気つけと心得、頂戴します。——承りました事は、はじめてで、まる切り記憶には

ないのですけれども、なるほど伺えば、人間生涯のうちに、不思議な星に、再び、出逢う事がありそうに思われます、宗さん……

——お聞き下さいまし——

落着いて申します。勿論、要点だけですが、あなたは国産の代理店を、昔、東京でなすつておいでだったと承りますし……そんな事は、私よりお悉しいと存じますが、浅草の観世音に、旧、九月九日、大抵十月の中旬過ぎになります、その重陽の節、菊の日に、菊供養というのがあります。仲見世、奥山、一帯に売ります。黄菊、白菊、みな小菊を、買つていらつしやい、買つていらつしやい、お花は五錢——あの、些と騒々しい呼声さえ、花の香を伝えるほどです。あたりを静に、圧えるばかり菊の薫で、これを手手に持つて参つて、本堂に備えますと、かわりの花を授つて帰りますね。のちに蔭干にしたのを、菊枕、枕の中へ入れますと、諸病を払うというのです。

二階の欄干へ飛ぼうとして、宙に、もんどりを打つて落ちて、小菊が枕になったという……頭から悚然としました。——近頃、信心気……ただ恭敬、礼拝の念の、薄くなりはしないかと危ぶまれます、私の身で、もし、一度、仲見世の敷石で仰向けに卒倒しましたら、頭の下に、観世音の菊も、誰の手の葉も枝もなく、行倒れになったでしょう。

いえ、転んだのではないのです、危あぶなく、怪しく美しい人を見て、茫然まぼろしとなったのです。大震災の翌年奥山のある料理店やに一寸ちよつとした会合がありまして、それへ参りましたのが、ちようどその日、菊の日に逢いました。もう仲見世むかへ向いますと、袖と裾と襟と、まだ日本鬻まげが多いのです。あの辺、八分まで女たちで、行くのも、来るのも、残らず、菊の花を手てにしている。折からでした、染模様になるよう、颯さつと、むら雨が降りました。紅梅こうばい焼やきと思うのが、ちらちらと、もみじの散るようで、通りかかった誰かの割鹿わりかの子の黄金きんの平ひら打うちに、白露しらつゆがかかる景氣の——その紅梅焼の店の前へ、お参まいりの帰りみち、通りがかりに、浅葱あさぎの蛇目傘を、白い手で、菊を持添すばえながら、すつと穿すばめて、顔を上げた、ぞつとするような美人があります。珍らしい、面長な、それは歌麿の絵、といつていい媚めかしなまい中に、うつとりと上品な。……すぼめた傘は、雨が晴れたものではありません。群集で傘と傘が渋しぶも紺かきも累かさり合あったために、その細い肩にさえ、あがきが要いつたらしいので。……いずれも盛装した中に、無雑作な櫛くし巻まきで、黒縷くろじゆす子の半襟はんまきが、くつきりと白い頸脚えりあしに水際が立つのです。藍色がかつた、おぶい半纏はんてんに、朱鷲ときいろ色の、おぶい紐を、大きく結ゆわえた、ほんの不断着ふだんぎと云った姿。で、いま、傘をすぼめると、やりちがえに、白い手の菊を、背中の子供へさしあげました。横はに刎はねて、ずり下おりる子供の重みで、するりと半纏の襟が

と、肩から着くずれがして、緋を一文字に衝と引いた、紉のような肌だ。」

「ははあ——それは、大宇宙の間に、おなじ小さな花が二輪咲いたと思えば宜しい。」

と、いう、宗参の眉が緊つた。

「鬢のはずれの頸脚から、すつと片乳の上、雪の腕のつけもとかけて、大きな花びら、ハアト形の白雪を見たんです。」

——お話につけて思うんです。——何故、その、それだけの姿が、もの狂おしいまで私の心を乱したんでしょうか。——大宇宙に咲く小さな花を、芥子粒ほどの、この人間、私だけが見たからでしょうな。」

「いや些と大きな、坊主でも、それは見たい。」

と、宗参は微笑んだ。

障子の日影は、棧をやや低く算え、欄間の下に、たとえば雪の積つたようである。

鳥影が、さして、消えた。

「しかし、その時の子供は、お奇駒さんの肌からのように落ちはしません。が、やがて、そのために——絵か、恋か、命か、狂気か、自殺か。弱輩な申分ですが、頭を搔筆するようにしまして、——時節柄、この不景気に、親の墓も今はありません、この土地へ、

栄耀えいようがましく遊びに参りましたのも、多日しばらく、煩わずらいました……保養のためなものでした。」

「大慈大悲だいじだいひ、観世音かんぜおん。おなくなりの母ははぎみも、あなたにお疎うとしかろうとは存ぞぜぬ。が、

その砌みぎり、何ぞ怪我みざらでもなさつたか。」

「否いや、その時は、しかも子供に菊を見せながら、艶えんに莞爾にっこりしたその面影おもかげばかりをなごりに、

人ごみに押隔おしへだてられまして、さながら、むかし、菊見にいでたつた、いずれか御ごれん簾ちゆう中の行列ぎり、前後の腰元こしもとの中へ、椋鳥むくどりがまぐれたように、ふらふらと分れたんです。

それ切きりですが、続けて、二年、三年、五年、ざっと七年目に当ります、一昨年のおなじ菊の日——三度に二度、あの供養は、しぐれ時で、よく降ります。当日は、びしよびしよ降ぶり。誰も、雨支度あまぢどで出ましたが、ゆき来の菊も、花の露つゆより、葉の雫しずくで、気も、しつとりと落着おちつきいていました。

「ここぞと、心も焦こげつくような、紅梅焼べんばいやくの前を通とおり過ぎて、左側、銀花堂ぎんかどうといたしましたか、花簪はなかんざしの前あたりで、何心なく振向くと、つい其処、ついうしろに、ああ、あの、その艶麗えんれいな。思わず、私は、突きのめされて二三間前げんへ出ました。——その婦人が立っていたのです。いや、静しずかに歩行あるしています。おなじ姿で、おぶい半纏はんてんで。

唯、背負紐おぶいひもが、お待ち下さい——段々だんだんに、迷いは深くなるようですが——紫と水紅とぎ

いろの手綱染たづなぞめです。……はてな、私をおぶった、お奇駒おきこまさんの手綱染を、もしその時知つていましたら……」

「それは、些ちとむずかしい。」

「承つた処では、お奇駒さんの、その婀娜あだなのと、もう一人の、お銀さんの、品よく澄んで寂さびしいのと、二人を合わせたような美しさで、一いつとき時に魅入つたのでしよう。七年めだのに、些ちつとも、年を。」

無論、それだけの美人ですから、年を取ろうとは思いません。が、そのおぶつてる子が、矢張り……と云つて、二度めの子だか、三度目だか、顔も年も覚えていません。

——まりやの面おもてを見る時は基督キリストを忘却する——とか、西洋でも言うそうです。

右になり、左になり、横ちがいに曲ゆがんだり、こちらは人をよけて、雨の傘からかさ越こしに、幾いくたび度も振返る。おなじ筋を、しかし殆ほとんど真直に、すつと、触るものがないように、その、おぶい半纏たづなぞめの手綱染が通りました。

普請中——唯今は仮堂です。菊をかえて下おりましたが、仏前では逢いません。この道よりほかにはない、と額下の角かくばし柱しらに立つて、銀杏いちょうの根をすかしても、矢大臣門やだいじんもんを視ながめても、手水鉢ちようずばちの前を覗いても、もうその姿は見えません。——

仏身円満無背相。

十方来人聞方面。——

宗参が、

「実に、実に。」

と面を正して言った。

「正面の、左右の聯の偈を……失礼ながら、嬉しい、御籤にして、思の矢の的に、線香のたなびく煙を、中の唯一條、その人の来る道と、じつと、時雨にも濡れず白くほろほろとこぼれるまで待ちましたが、すれ違い押合う女連にも、ただ袖の寒くなりますばかり。その伝法院の前を来るまでは見たのですのに、あれから、弁天山へ入るまでの間で、消えたも同じに思われました。」

宗参の眉が動いた。

「はて、通り魔かな。——或類属の。」

「ええ通り魔……」

「いや、先ず……」

「三度めに。」

「さんど……めに……」

「え。」

「なるほど。」

「また、思いがけず逢いましたのが、それが、昨年、意外とも何とも、あなた！……奥伊豆の山の湯の宿なんです。もう開けていて、山深くも何ともありません、四五度行馴れておりますから、谷も水もかわった趣と云つてはありませんが、秋の末……もみじ頃で、谿河から宿の庭へ引きました大池を、瀬になつて、崖づくりを急流で落ちます、大巖の向うの置石に、竹の樋を操つて、添水——僧都を一つ掛けました。樋の水がさらさらと木の削りめへかかつて一杯になると、ざアと流へこぼれます、拍子を取つて、突尖の杵形が、カーン、何とも言えない、閑かな、寂しい、いい音がするんです。其処へ、ちらちらと真紅な緋葉も散れば、色をかさねて、松杉の影が映します。」

「はあ、添水——珍らしい。山田守る僧都の身こそ……何とやら……秋はてぬれば、どう人もなし、とんと、私の身の上であります、案山子同様の鹿おどし、……たしか一度、京都、嵯峨の某寺の奥庭で、いまも鹿がおとずれると申して、仕掛けたのを見ました。——水を計りますから、自から同じ間をもつて、カーンと打つ……」

「慰みに、それを仕掛けたのは、次平と云つて、山家から出ましたが、娑婆気な風呂番で、唯扁平い石の面を打つただけでは、音が冴えないから、と杵の当ります処へ、手頃な青竹の輪を置いたんですから、響いて、まことに透るのです。反橋の渡り廊下に、椅子に掛けたり、欄干にしゃがんだりで話したのですが、風呂番の村の一つ奥、十五六軒の山家には大いのある。一昼夜に米を三斗五升搗く、と言います。暗の夜にも、月夜にも、添水番と云つて、家々から、交代で世話をする……その谷川の大杵添水。笕の水の小添水は、二十一秒、一つカーンだ、と風呂番が言いますが、私の安づもりで十九秒。……旦那、おらが時計は、日に二回、東京放送局の時報に合わせるから、一厘も間違わねえぞ、と大分大形なのを出して威張る。それを、どうこうと、申すわけではありませんけれども。」

「時に、お時間は。」

「つれのものも販りません。……まだまだ、ご緩り——ちようど、お銚子のかわりも参りました——さ、おあつい処を——

——で、まあ、退屈まぎれに、セコンドを合わせながら、湯宿の二階の、つらつらと長い廻り縁——一方の、廊下一つ隔てた一棟に、私の借りた馴染の座敷が流に向いた処にあるのです——この廻縁の一廓は、広く大々とした宿の、累り合つた棟の真中処に

ありまして、建物が一番古い。三方縁で、明りは十分に取れるのですが、余り広いから、真中、隅々、昼間でも薄暗い。……そうでしょう、置敷居おきしきいで、間まを劃しきつて、道具立ての襖ふすまが極きまれば、十七室ま一時いつときに出来ると云いますが、新館、新築で、ここを棄おてて置くから、中仕切なかじきりなんど、いつも取払とつて、畳数お凡よそ百五六十畳と云う古御殿です。枕を取つて、スポンジボオル、枯かれなくていい、万年いけの大松を抜いて、（構かえました、）を行やる。碁盤、将棋盤ぶんどを分捕ぶんつて、ボックスと称となえますね。夜具蒲団の足場で、ラグビイの十ちタイムも捻ひねり合あおう、と云う学生の団体でもないと、殆ほとんど使つかつた事ことがない。

行く度に、私は其処そこが、と云つて湿しりくさい、百何十畳ではないのです。障子外の縁を何処どこまでも一直線ちくせんに突つき当あたつて、直角まに折まれ曲まつて、また片かた側がわを戻かえつて、廊下らうか通りをまたその縁へ出でて一廻り……廻まわると云うと円味まるみがあります、ゆきあたり、ぎくり、ぎゆうぎゆう、ぐいぐいと行いつたり、来きたり。朝掃除あさそうじのうち、雨あめのざんざぶり。夜、女中にようぢゆうが片づけものして、床とこを取とつてくれる間、いい散歩で、大好きです。また全館ぜんくわんのうち、帳場ちやうぢやうなり、客室きやくまなり、湯殿ゆでんなり、このくらい、辞儀じぎ、斟しん酌しやくのいらぬ、無む人にんの境きやうはないでしよう。

が、実は、申まされたわけではありませんけれども、そんならといつて、瀬せの音ねに、夜寝

られぬ、苦しい真夜中に其処を廻り得るか、というと、どういたして……東から南へ真直の一縁ひとえんだつて、いい年をしながら、不気味で足が出ないのです。

峰の、寺の、暮六くれむつの鐘が鳴りはじめた黄昏たそがれです。樹立こたちを透かした、屋根あかりに、安時計のセコンドを熟じつと視みる……カーン、十九秒。立停たちどまつたり、ゆっくり歩行あるいたり、十九秒、カーン。行つたり、来たり、カーン。添水そうずばかり。水の音も途絶とつたえました。

欄干らんかんに一枚かかった、朱葉もみじも翻ひるがえらず、目の前の屋根に敷いた、大おお櫂かの落葉おちも、ハラリとも動かぬのに、向う峰の山やま風まおろしが颯さつときこえる、カーンと、添水そうずが幽かすかに鳴ると、スラリと、絹摺きぬずれの音がしました。

東の縁の中ごろです。西の角から曲つて出たと思う、ほんのりと白く、おもながな……」

「艶々つやつやとした円鬚まるまげで、子供を半纏はんてんでおぶつたから、ややふつくりと見えるが、背のすらりとしたのが、行違ゆきちがいに、通りざまに、(失礼。)と云つて、すつとゆき抜けた、この背負紐おぶひもが、くつきりと手綱染たづなぞめ——あなたに承る前に存じていたら——二階から、私は転げたでしょう。そのかわりに、カーン……ガチリと時計が落ちました。

処ところが——その姿の、うしろ向きに曲る廊下もつとが、しかも、私の座敷の方、尤も三室並みまんで

いるのですが、あと二室ふたまに、客は一人も居ない筈、いや全く居ないのです。

変じやアありませんか、どういうものか、私の部屋へ入ったような気がする、とそれ
いて、一寸ちよつと、足が淀よどみました。

腕組みをせずかかと舐もじると、もとより開放あけはなしたままの壁に、真黒な外套が影法師
のようにかかつて、や、魂が黒く抜けたかと吃驚びつくりしました。

床の間に、雁来紅はげいとうを活けたのが、暗く見えて、掛軸に白の野菊……蝶が一羽。」

と云いかけて、客僧のおくりものを、見るともなしに、思わず座を正して、手をつく
と、宗参も慇懃しとねすべに褥すべを這すべったのである。

「——ですが、裏階うらぼしご子の、折曲おれまがるのが、部屋の、まん前まへにあつて、穴あなのように下廊下
へ通うのですから、其処を下りた、と思えば、それ切きりの事なんです。

世にも稀な……と私が見ただけで、子供をおぶった女は、何も、観世音の菊供養、むら
雨さめの中をばかり通るとは限らない。

女中は口が煩うるさい。——内証ないしよで、風呂番に聞いて見ました。——折まから閑散期……とい
うが不景気の客かきずくまで、全館八十ばかりの座敷数かずの中に、客は三組みくみばかり、子供づれな
どは一人もない、と言います。尤もつとも私わたしがその婦おんなにすれ違ちがった、昨きのうの日は、名古屋から伊豆

まわりの、大がかりな呉服屋が、自動車三台で乗込んで、年に一度の取引、湯の町の女たち、この宿の番頭手代、大勢の女房娘連が、挙つて階下の広間へ集りましたから、ふとその中の一人かも知れない、……という事で、それは……ありそうな事でした。――

別して、例の縁側散歩は留められません。……一日おいて、また薄暮合、おなじ東の縁の真中の柱に、屋根の落葉と鼻を突合わせて踞んで、カーン、あの添水を聞き澄んでいたのです。カーン、何だか添水の尖つた杵の、両方へ目がついて、じろりと此方を見るように思われる。一人で息をしている私の鼻が小鳥の嘴のように落葉をたたくらしく、カーン、奥歯が鳴るような、夕迫るものの氣勢がしますと、呼吸で知れる、添水のくり抜きの水が流を打つて、いま杵が上つて、カーン、と鳴る。尖つて狐に似た、その背に乗つて、ひらりと屋根へ上つて、欄干を跨いだように思われるまで、突然、縁の曲角へ、あの婦がほんのりと見えました。」

「添水に、婦が乗りましたか、ははあ、私が稲荷明神の額裏を背負つたような形に見えます。」

寸時、顔を見合せた。

「……ええ、約束したものに近寄るように、ためらいも何も敢てせず、すらすらと来て、

欄干に手をつけて向う峰を、前髪に、大櫛に、雪のような顔を向けてならんだのです。見馴れた半纏はんてんを着ていません。鎧よろいのようなおぶい半纏を脱いだ姿は、羽衣を棄てた天女に似て、一層いつそうなよなよと、雪身せっしんに、絹糸の影が絡まつわったばかりの姿。帯も紐も、懐紙かいし一重ひとえの隔へだてもない、柱が一本あるばかり。……判然はつきりと私は言ことばを覚えています。

——坊ちゃん……ああ、いや、お子さんはどうなさいました。——

——うっちゃって来ました。言うことをきかないから。……子どもに用はないでしょう

と云つて、莞爾にっこりとしたんです。

宗さん。

——菩薩と存じます、魔と思います——

——うかがい早い、猛然と、さ、どう気が狂ったのか、分りませんが、踊り蒐かかつて、白い頸くびを抱きました。が、浮いた膝で、使つかい古ふるしの箱火鉢を置き棄てたのを、したたかに踏ふんで、向うのめりに手をついた、ぼつと立っただのは灰ですが、唇には菊の露を吸いました。もう暗い、落葉が、からからと黒く舞つて、美人は居ません。

——とうよりは、立った、立つより、よろけて、確たしかに其処へ隠れたらうと思う障子ひとえ一重、そ

の百何十畳の中を、野原のように、うろつく目に、茫茫と草が生えて、方角も分らず。その草の中に、榜示杭ぼうじくがいに似た一本の柱の根に、禁厭まじないか、供養か、呪詛のろいか、線香が一束、燃えさしの蠟燭が一挺ちよう。何故か、その不気味さといつてはなかつたのです。

部屋へ舁かえつて、仰向けに倒れた耳に、添水そうずがカーンと聞こえました。杵の長い顔が笑うようです。溪流の上に月があつて。――

また変に……それまでは、二方にほうに五十六枚ずつか――添水に向いた縁は少し狭い――障子が一枚なり、二枚なり、いつも開いていたのが、翌日から、ぴたりと閉りました。めつたに客は入れないでも、外見上、其処は体裁で、貼りかえない処も、切張きりばりがちやんとしである。私は人目を憚はばかりながら、ゆきかえり、長々とした四角なお百度をはじめようになつたんです。

――お百度、百万遍、丑うしの時とき参まゐり……ま、何とも、カーン、添水の音ねを数取りに、真夜中でした。長い縁は三方ともに真の暗やみです。何里歩あるいたとも分らぬ気がして、一まわり、足を摺すつて、手探りに遙々はるばると渡つて来ますと、一步上へ浮いてつく、その、その踏心地ふみごち。足が、障子の合せ目に揃うわぞうりえて脱いだ上草履うわぞうりにかかった……当つたのです。その踏心地。ほんのりと人肌のぬくみがある。申すも憚はばられますが、女と一つ衾しとねでも、こ

の時くらい、人肌のしつとりとした暖さを感じた覚えがありません。全身湯を浴びて、香ばしい汗になった。ふるえたか、萎なえたか、よろよろになった腰を据えて、障子の隙間へ目をあてて、熟じつと、くらやみの大広間を覗きますと、影のように、ああ、女の形が、ものの四五十人もあつて、ふわふわと、畳を離れて、天井の宙に浮いている。帯、袖、ふらりと下さがつた裾を、幾重、何枚にも越した奥に、蠟燭と思う、小さな火が、鉛の沼のような畳に見える。それで、幽かすかに、朦朧もうろうと、ものの黒白あいろがわかるのです。これに不思議はありません。柱から柱へ幾条いくすじともなく綱を渡して、三十人以上居る、宿の女中たちの衣類が掛けてあつたんです。帯も、扱しき帯も、長襦ながじゆばん袷、羽織はもとより……そういえば、昼間時々声が交つて、がやがやと女中たちが入りを出しました。買込んだ呉服の嬉ついでしさ次手に、箆ひまを払つた、隙ひまふさぎの、土用干どようぼしの真似まねなんでしょう。

活いけばな花の稽古の真似まねもするのがあつて、水際、山やま懐ふところにいくらかもある、山菊、野菊の花も葉も、そこここに乱れていました。

どの袖、どの袂から、抜けた女の手ですか、いくつも、何人も、その菊をもって、影のようにゆききをし出した、と思う中うちに、ふつと浮いて、鼻筋も、目も、眉も、あでやかに、おぶい半纏ばんてんも、手綱たづな染ぞめも、水際の立つたのは、婀娜あだに美しい、その人です。

どうでしょう、傘まで天井に干した、その下で、熟と、此方を、私を見たと思うと、撫肩でがたをくねって、媚なまめかしく、小菊の枝で一才あやしなから、

——坊や——（背に子供が居ました。）いやなおじさんが……あれ、覗く、覗く、覗くよう——

と、いう、肩ずれに雪の膚はだが見えると、負おぶわれて出た子供の顔が、無精髻ははやを生した、まづい、おやじの私の面つらです。莞爾にこりとその時、女が笑った唇が、縹はなだい色いろに真青に見えて、目の前へ——あの近頃の友染ゆうぜんむき向にはありません、雁来紅はげいとを肩から染めた——釣り下げた長襦袢ながじゆばんの、宙にふらふらとかがった、その真中へ、ぬつと、障子一杯の大きな顔になつて、私の胸へ、雪の釣鐘ほどの重さが柔々やわやわと、ずしん！ とかかった。

東京から人を呼びます騒ぎ、仰向けに倒れた、再び、火鉢で頸ぼんのくぼ窪くぼを打ったのです。」

「また、お煩わづらいになるといかん。四十年来のおくりもの、故わざと持参しましたが、この菊細工の人形は、お話の様子によつて、しばらくお目に掛けますまい。」

引抱ひっかかえて立った、小脇の奉書包は、重いもののように見えた。宗参の脊せが、すつくと伸びると、鬘斗のしの紫の蝶が、急いで包んだ風呂敷のほぐれめに、霧を吸って高く翻ひるがえつたの

である。

階はしご子段くだんの下で、廊下もとを飯もる、紫むらのコオトと、濃こいお納戸ひまにすれ違ちがったが、菊人形きくどに、気きも心こも奪うばわれて、言ことばをかける隙ひまもない。

玄関くわんで見送まつて、尚なおねだりがましく、慕こつて出ると、前の小川せせらぎに橋はがある。門かどの柳やなぎの散ちる中に、つないだ駒こまはなかつたが、細せ流らぎを織をる木この葉はは、手綱たづなの影かげを浮うかして行く：
…流ながれに添そった片側かたがはの長い土塀つちべを、向むかうに隔へたる、宗参法師そうさんぼうしは、間近まぢかながら遥々はるばると、駅路えきぢろを過すぐる趣おもむして、古鼠ふるねの帽子ぼうしの日向ひなたが、白髪しろがみを捌さばいたようである。真白ましろな遠山いただきの頂たけは、黒髪くろがみを捌さばいたような横雲よこぐもの見えがくれに、雪ゆきの駒こまの如ごとく駈かけた。

名剣神社なけんじんじゃの拜殿ひやうでんには、紅あかの袴はかまの、お巫子みこが二人、かよいをして、歌うたの会あひがあつた。

社務所しゃむしょで、神職かみたちが、三人、口くちを揃そろえて、

「大先生だいせいしん。」——

この同音どうおんは、一車いっしやを睽どうじやく 若わかたらしめた。

「大先生だいせいしんは、急に思おも立いたつたとありまして……ええ、黒姫山くろひめやまへ——もみじを見に。」——

「あら、おじさん。」

娘の手が、もう届く。……外套の袖を振切つて、いか爪のぼりが切れたように、穂坂は、すっと深更しんこうの停車場に下りた。急行列車が、その黒姫山の麓ふもとの古駅こえきについて、まさに発車しようとした時である。

その手が、爛かんをつけてくれた魔法瓶、さかなにとて、膳ぜんのをへずつた女房くろみの胡桃くるみにも、且かつ心を取られた、一いっしょ所にたべようと、今しがた買った姫上川ひめかみがわの鮎なれずしの熟鮎なれずしにも、恥ちずべし、涙ぐましい思おもいをしつつ、その谿谷けいこく谷をもみじの中へ入つて行く、残のこの桔梗ききょうと、うら寂さびしい刈萱かるかやのような、二人の姿の、窓あかりに、暗くせまったのを見つつ、乗放のりはなして下りた、おなじ処おに、しばらく、とぼんと踞しゃがんでいた。

しかし、峰やまを攀よじ、谷を越えて、大宗参だいそうさんの菊細工きくこぎを見ることが出来たら、或あるいは、絵のよい題材を得ようも知れない。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 泉鏡花集 黒壁」ちくま文庫、筑摩書房

2006（平成18）年10月10日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日第1刷発行

初出：「文藝春秋」

1932（昭和7）年1月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2015年10月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

菊あわせ

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>